



チエルシアアニマル
クリニック院長
(富山市上飯野)

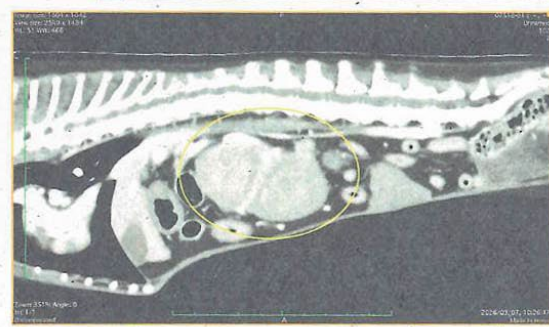
小池 博行

抗がん剤はつらい治療です。強い吐き気や倦怠感、脱毛に耐えながら治療を続ける姿を思い浮かべる方も多いでしょう。その印象は間違っていないかもしれません。ただし、それは抗がん剤の「本当」の半分です。

抗がん剤は、がん細胞だけでなく正常な細胞にも影響する強い薬です。人間の医療では、がんを治す、あるいは再発の可能性を下げるために、一時的な負担を受け入れて治療効果を高めることがあります。つまりには、治る可能性を追うという意味があります。

では、犬や猫も同じなのでしょう。動物の抗がん剤治療では、

犬猫のリンパ腫の 抗がん剤治療



リンパ腫(丸で囲んだ部分)を発症した犬のCT画像

食べる、歩く、眠る、家族と過ごすといった普段の生活を守ることが優先します。副作用によって元気な時間を失うなら、治療そのものが目的から外れてしまうからです。

リンパ腫は、その違いがよく分かる病気です。抗がん剤が効くと、

日常取り戻すこと優先

腫れていたリンパ節が小さくなり、食欲や活気が戻る可能性があります。散歩をし、食事を楽しみ、家族のそばで過ごす。治療で目指すのは、そんな日常を取り戻すことです。

もちろん動物でも副作用は起こります。食欲低下、嘔吐、下痢、白血球減少などがみられ、まれに入院が必要になることもあります。そのため、血液検査と体調を確認しながら、薬の減量や延期、変更、吐き気止めなどを組み合わせます。予定通り薬を入れることより、その子が元気に暮らせることを優先します。

ここまで読むと「それなら人間より動物の治療の方がよいのでは」と思われるかもしれません。しかし、そこには代償があります。効果と副作用は切り離せません。副作用を抑える分、がんをたたく力にも限界があります。犬や猫のリンパ腫では、多くの場合、完治ではなく症状がほとんど分からなくなる「寛解」を目指します。そして寛解しても、再発する可能性は残ります。

負担を受け入れて治る可能性を追う治療と、治らない可能性を受け入れて元気に生きる時間を守る治療。どちらが優れているのかわかりませんが、抗がん剤がすべての犬や猫に適しているわけではありません。しかし「かわいそう」というイメージだけで、最初から選択肢を閉じる必要はありません。効果、副作用、限界を知ったうえで、その子に合う治療を考えてほしいと思います。

毎月第1土曜掲載